平成 26 年 5 月 20 日

J. フロント　リテイリング　株式会社
代表取締役社長　山本良一　殿
株式会社　大丸松坂屋百貨店
代表取締役社長　好本達也　殿

一般社団法人 日本建築学会
近畿支部支部長　小坂郁夫

大丸心斎橋店本館の保存活用に関する要望書

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴社におかれましては、大阪市中央区心斎橋筋に位置いたします大丸心斎橋店本館を建て替える予定である由、新聞等の報道により聞き及んでおります。

本会では以前より我国近代建築の調査研究を行い、その成果を『日本近代建築総覧』にまとめ 1980 年（昭和 55）年に刊行しております。その中に当該建物が歴史的文化的価値の高い近代建築として記されておりますこと、ご高承のことと存じます。また当該建物は、大阪府教育委員会がまとめた『大阪府の近代化遺産』にも、「注目すべき近代化遺産」として掲載されているほか、近代建築の保存に関する国際組織 DOCOMOMO の日本支部、DOCOMOMO Japan により優れた日本の近代建築 100 選の 1 つとして選定されております。その歴史的文化的価値が、すでに広く認められている建物であり、長きにわたって多くの市民に愛されてきた、大丸の象徴的存在といえます。

当該建物は、日本で活躍したアメリカ人建築家 W.M.ヴォーリズの設計によって 1933（昭和 8）年に竣工した鉄筋コンクリート造の建物で、アール・デコやゴシック風の装飾を建物の内外にまとった見事なデザインによるものです。戦前期大阪の繁栄を象徴する建物であり、大阪のメインストリート御堂筋に面して建ち、地域の都市景観にも寄与しています。

その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本における歴史的建築として、また景観上も大変優れて価値の高いかけがえなきものであります。こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げる次第です。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 26 年 5 月 20 日

大丸心斎橋店本館についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査 笠原 一人

・建物の概要

大阪府大阪市中央区心斎橋筋 1 丁目に位置する大丸心斎橋店は、1922（大正 11）年から 1933 年（昭和 8 年）にかけて主要部分が竣工した、鉄骨鉄筋コンクリート造地上 8 階、地下 3 階建ての建物で、北西部に塔屋を持ち、軒高 102 尺、塔屋頂部までの高さが 129 尺ある。建物の東側（心斎橋筋側）が第 1 期（南側／1922 年竣工）と第 2 期（北側／1925 年竣工）に分けて建設され、御堂筋の拡張と地下鉄の開通に合わせて建物の西側（御堂筋側）が第 3 期（南側）と第 4 期（北側）に分けて建設された。

設計者は、関西を拠点に全国で活躍したアメリカ人建築家 W.M.ヴォーリズが主宰したヴォーリズ合名会社（第 1 期・第 2 期）およびヴォーリズ建築事務所（第 3 期・第 4 期）であり、施工者は竹中工務店である。建築面積は 1,350 坪（竣工当時）、延床面積は 11,700 坪（竣工当時）である。第 2 次世界大戦末期の空襲により 5 階以上を焼失したが、戦後復旧し、第 1 期・2 期に建設された建物東側に 7・8 階が増築された。現在も百貨店大丸の心斎橋店本館として営業を続けている。

外壁はスクラッチタイルやテラコッタで覆われ、そのデザインはネオ・ゴシック様式を基調として、イスラム風の文様やアール・デコのデザインを織り交ぜた見事なもので、全体的に竣工当時の姿を今日においてなお良く保持している。とりわけ屋内では、特に 1 階の売り場は天井や壁面の装飾が当時のまま残されており、中 2 階との吹き抜け部分、エレベータや階段周りなどが特色で、見どころが多い。

当該建物は日本建築学会の発行による全国の重要な近代建築をリスト化した『日本近代建築総覧』（1980 年）に掲載されている。2003 年には、近代建築の保存に関する国際組織の DOCOMOMO の日本支部 DOCOMOMO Japan により優れた日本の近代建築 100 選の 1 つとして選定されている。また大阪府教育委員会の発行による大阪府内の重要な近代建築の調査報告書『大阪府の近代化遺産』（2007 年）にも「注目すべき近代化遺産」のひとつとして掲載されている。さらに大阪市内の都市景観的に優れた建造物として「大阪市都市景観資源」に選定されている。当該建物が持つ高い歴史的文化財的価値が、社会的に高い評価を得ていることを示している。

・建築デザイン上の特徴

当該建物のデザイン上の特徴を挙げる。外観については、1、2階が花崗岩張り、3から6階が茶褐色スクラッチタイル張り、7階および塔屋はテラコッタと3層に分けられ、ヨーロッパの古典主義の典型である3層構成に基づいている。しかし古典主義のような円柱や半円アーチを用いてまとめられているわけではなく、全体に直線を強調したアール・デコの特徴を備えている。また細い柱によって外観の垂直性が強調されたり、上部が尖ったアーチが用いられたり、レースの織物のような細かな装飾が見られるなど、ゴシック様式の特徴も備えている。しかしゴシック様式がそのまま模倣されているわけではない。イスラム模様にも見える細かな直線の組み合わせに翻訳され、他のどのような建物にも見られない独自のデザインとなっている。心斎橋筋側の入口上部には、現在の大丸のマークに用いられているテラコッタ製の孔雀をモチーフとした見事な装飾が来店者を迎える。

また屋内の1階では、御堂筋側の入口には細かな装飾の扉が設置され、その上部はフラミンゴなどをモチーフとしたステンドグラスで飾られている。天井は細かな幾何学形態を組み合わせた色鮮やかな文様が埋め尽くされ、大理石で覆われた柱もやはり直線を強調した8角形のもので、柱頭は伝統的なデザインとは異なる星形の装飾で覆われている。エレベータ付近のデザインについても、1階はゴシック風、上階はアール・デコ風のものとなっており、大理石や金属を組み合わせた多彩な色彩とともに来店者に強い印象を与える。加えて階段にも特徴的なアール・デコ風のデザインが見られる。階段を上がると、吹き抜け内に中二階が設けられている。こうした変化のある空間構成も当時のまま残されている。

このように、建物の内外にわたって、非常に密度が高くかつ洗練されたデザインの装飾が、様々な材料を用いて施されている点に大きな特徴がある。いずれも過去の様式の模倣になっておらず、他の建築に見ることができない独自のデザインによるものである。巨大な工芸品のような見事な建物だと言える。

・W.M.ヴォーリズの作品としての価値

設計者のW.M.ヴォーリズ（1880-1964年）は、アメリカ・カンザス州で生まれた。1905年に英語教師として来日し、現在の滋賀県近江八幡市を拠点に活動した。その後、学校経営やメンソレータムの製造・販売など様々な事業を展開したが、1908年に建築設計監督事務所を開設して以来、建築設計を主な活動の一つとした。ヴォーリズが設計した建物は、住宅や商業施設、学校などを中心に、戦前だけで1,400件を超えたとされる。

ヴォーリズの設計手法の特徴は、ビルディングタイプごとに採用する様式を変え、様々な、かつ独自のデザインを生み出す点にある。例えば、スパニッシュ様式による関西学院校舎（1929年）や神戸女学院校舎（1933年）、ルネサンス様式に基づいた旧居留地38番館（1929年）や旧百三十三銀行今津支店（1923年）、チューダー様式による大丸ヴィラ（旧

下村邸／1934年）や旧室谷邸（1935年）、ロマネスク様式による日本基督教団大阪教会（1922年）、ゴシック様式による旧神戸ユニオン教会（1929年）や大同生命ビル（1925年）、アール・デコ様式による山の上ホテル（1936年）や豊郷小学校（1937年）など、実に多彩である。しかもそれらはいずれも過去の様式の模倣に終わらず、抽象化されたモダンなデザインに則り、また部分的に他の様式と組み合わせられているなど、独自のものとなっている。

そんな多彩なヴォーリズの作品群の中にあっても、この大丸心斎橋店は異彩を放つ作品だと言える。まず数あるヴォーリズの作品の中にあって、単体の建物としては最大規模のものであることが特徴として挙げられる。また前述のように、ゴシック様式やアール・デコ様式、さらにはイスラム風のデザインが混ざり合った独自のデザインによるものであり、モダンであるが細かい装飾で外観と室内が埋め尽くされている。ヴォーリズが設計した建物に限らず、商業施設には大衆を魅了する装飾を備えたものが多いが、これほどの高い密度と精度でデザインされた百貨店建築は他に類を見ない。ヴォーリズの作品履歴から見ても、極めて貴重な建築作品だと言える。

なお大丸心斎橋店は、1918年に新店舗を現在の場所に建設するが、火災により1920年に焼失している。その1918年竣工の建物もヴォーリズの設計であった。現在の建物は、その復興として、再びヴォーリズによって設計されたものである。

・御堂筋および心斎橋地区の建築遺産としての価値

当該建物は、単体の建物として歴史的文化遺産的価値を持つだけでなく、大阪のメインストリートである御堂筋や心斎橋地区という都市計画的かつ景観的な視点から見ても、高い歴史的文化的価値を持つものである。

当該建物が面している御堂筋は、地下鉄御堂筋線の建設と合わせて1926年から拡幅工事が始まり1937年に完成した、梅田と難波を結ぶ街路である。当該建物は、当初心斎橋筋を正面として、現在の建物の東側だけが建設されたが、御堂筋の拡幅工事に合わせて御堂筋側に増築され、御堂筋に面した現在の建物の西側を正面とする建物へと生まれ変わった。つまり、当該建物は御堂筋の存在を強く意識して造られたものである。御堂筋の拡張工事は近代大阪の繁栄を象徴するものであり、当該建物もまた近代大阪の繁栄を象徴する建物だと言える。

また当該建物が建つ地域は、第2次世界大戦末期に大規模な空襲を受けた上、戦後に開発が繰り返されているため、周辺には戦前期の建物がほとんど現存していない。そんな中にあって、竣工当時の姿をよくとどめる当該建物は、御堂筋や心斎橋地区の都市景観や文化にとって、欠かすことのできない極めて貴重なものである。

・期待される活用

前述のように、当該建物は建物のデザインに大変優れており、設計者の作品履歴を見ても、そして時代や都市計画的な視点から見ても、高い歴史的文化的価値を有する貴重なものである。このような優れた歴史的建造物が失われるようなことがあっては、大阪のみならず我国の建築文化にとっても大きな損失である。

当該建物のような鉄骨鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっている。世界遺産の登録などを行うユネスコ（UNESCO）の諮問機関であるイコモス（ICOMOS）は、2011 年 6 月に「マドリッド・ドキュメント」を採択したが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした 20 世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を用いて、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言している。

当該建物は、現在も現役の百貨店として使われている。今後も、建物に多少の手が加えられることがあったとしても、従来通り使われ続けることが望ましい。特に、竣工時の姿を十分に残している外壁や塔屋、また 1 階から 2 階にかけての室内は、エレベータや階段周り、天井面に至るまでの見事な装飾を含めて、現在のまま維持し続けることが望ましい。

またこうした建物を保存活用するために、技術的な努力を行うだけでなく、積極的に法制度を活用することも望まれる。都市計画の制度を積極的に運用することで、当該建物を残すことも可能である。

例えば、歴史的建造物の保存に貢献している都市計画の制度の一つに、特定街区というものがある。これは、ある街区において、既定の容積率や建築基準法による高さ制限を適用するのではなく、それとは別の都市計画により容積率・高さなどを定める制度である。この制度を適用することで、歴史的建造物の保存のために、建物が建つ土地の容積率を別の土地に上乗せし、本来以上に高層化することが可能となる。

近年、この制度を用いて、国の重要文化財である東京の三井本館が元のままの姿で保存される代わりに、隣接地に本来の容積率を超える高層ビルが建設された。また東京駅の修復および復元にも同様の制度が用いられ、東京駅で使われなかった容積率が他の土地に上乗せされ高層化が行われている。大丸心斎橋店の場合、南北に北館、南館の建つ敷地が存在する。この制度を適用すれば、北館で高層化を図り、本館を現在のままの姿で活用することも可能であろう。

他にも都市再生特別地区など、都市空間の高度利用のために大幅な規制緩和が可能な、柔軟な都市計画の制度が存在する。このような制度の適用には行政による都市計画の手続きが必要であるが、大丸心斎橋店本館の文化的価値については大阪市も高く評価しており、保存活用による地区指定は、十分に可能であると考えられる。技術的な方法にとどまらず、多角的な検討と叡慮により、歴史的、地域的特徴を備えた当該建物の文化財価値の保存と継承が計られるよう切望するものである。